様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：３７１１８
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2016
課題番号：２６８７０７８９

研究課題名（和文）トルコにおける考古遺跡の遺産化と観光開発に関する社会人類学的研究

研究課題名（英文）Social Anthropological Research on the Process of Making Archaeological Sites Heritage and Tourism Development in Turkey

研究代表者
田中　英資（TANAKA, Eisuke）

福岡女学院大学・人文学部・准教授

研究者番号：００６１００７３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、文化遺産に利害をもつ集団だけでなく、遺産とみなされる文化的所産そのものにも目を向けることで、考古遺跡の遺産化と観光開発の間で生まれている関係を明らかにすることである。具体的には、主にトルコ地中海地方の遺跡（パターラ、キビラ、ミュラ、ダスクィリオンなど）とその周辺に暮らす地域住民や観光産業、遺跡を発掘する考古学者の動きについての民族誌的な調査を行った。遺産をめぐる社会的関係は、遺跡から何が出土するかに左右される。特に、調査した事例の比較を通して、遺跡から出土したものの違いが、発掘や観光開発の進展や地元住民の遺跡に対する認識の差異を生んでいることが示された。

研究成果の概要（英文）：The aim of this research is to elucidate the social relationship between heritage making of archaeological sites and tourism development by focusing on the material remains marked as ‘heritage’ as well as those groups who show their interests in heritage. Ethnographic fieldwork was conducted in the archaeological sites mainly in Mediterranean Turkey, such as Patara, Kibyra, Myra, and Daskyleion to explore how those sites are perceived by different groups (the locals, archaeologists, tourism industry etc.). What affects the relationship between different interest groups is what is discovered from the archaeological sites through excavations. In particular, comparison between the case studies suggests that the difference between what is excavated from each site produces the difference between progress of the excavation projects, subsequent tourism development, and the local perceptions of the site.

研究分野：文化人類学

キーワード：トルコ　文化遺産　発掘　保存修復　観光開発

１．研究開始当初の背景

文化遺産に関する既存の研究では、トルコにおける事例も含めて、遺産とされた有形・無形のモノを人々がどのように自らの政治・経済的資源としていくか、利害関係を持つ集団によるそのアプローチの違いに焦点が当たってきた[Breglia, 2006; Bartu-Candan, 2007 など]。そこでの課題のひとつは、そうした人々の政治・経済的資源となる過程における、遺産とされた文化的所産そのものの役割である。実際のところ、開発事業などで破壊の危機は、「遺産」とみなされる何かが発見されてはじめて、政治・経済的利害の絡む問題として認識されるようになる。つまり、遺産化とそれに伴う政治・経済的な資源化の過程では、遺産の実在は所与のものではないということになる。また、そうした遺産化の対象となるモノが見出されて「遺産」と認識されることで、そうしたモノと人々の間に生まれた特定の関係性が生成していると捉える必要がある。

さらに、近年の文化人類学では、人々だけでなく、すでに実在する何か（モノ、人工物）を、社会関係を構成するアクターとみなし、現実とはそれらと人々との間に生まれる特定の社会関係を通じて構築されたとする見方に注目が集まりつつある[Vivieros de Castro, 1998; Strathern, 2004(1991)]。しかし、「存在論的転換」とも呼ばれているこの新しい文化人類学の動きは、人類学的科学技術研究や医療人類学など一部の領域を中心に進んでおり、遺産研究への応用はなされていなかった[cf. 春日, 2011]。

申請者はこれまで、トルコにおける国民意識の形成過程において遺産とされたモノが果たした関係、盗掘による遺産の国外流出やその返還の問題などを事例に、遺産に利害関心を持つ様々な集団の相互交渉のなかで遺産概念がどのように構築されているかについて研究を進めてきた[Tanaka, 2010, 2013, 2015; 田中 2017 etc.]。これまで述べてきた研究上の欠落を埋めるべく、本研究課題では、遺産とされたモノに利害関心を持つ人々だけでなく、そうした遺産化の対象そのものが果たしている役割に着目して、遺産化や観光開発をめぐって生じている社会関係を明らかにすることが重要であると考えた。

２．研究の目的

上述の研究背景に基づき、本研究課題では主にトルコ地中海地方の考古遺跡の発掘とその後の保存・管理の状況、およびそれらの遺跡を資源とした観光開発の進展について、現地調査を行うことで検証し、遺産とされた文化的所産とその周辺の様々な利害集団の関係性のあり方を明らかにすることを目的とした。具体的な調査項目は、以下の通りである。

① <u>遺跡の発掘とその後の遺産化の過程</u>
遺跡の発掘・保存・管理の経緯をあとづけ、発掘調査の進展が遺産としての保存・管理のあり方や、考古学者と地元住民の間の関係性にどのような変化を与えているのかを明らかにする。

② <u>遺産化と観光開発の関わり</u>
発掘調査からの出土物によって、調査地における観光資源への認識がどう変わるのか、翻ってそれが発掘調査にどう影響するのかを聞き取り調査から明らかにする。

③ <u>発掘、保存・管理や観光開発を支える制度・言説</u>
遺産化や観光開発を支えるトルコの法制度や国際的なガイドライン、言説と、それらに対する人々の受けとめ方を検証し、それらの枠組みのなかで遺産とみなされたものの意義がどう位置づけられ、調査地での発掘・保存・管理のあり方や観光開発にどのような影響を与えているのかを調査する。

上記の調査項目をふまえ、遺産とされた文化的所産とそれに関わる人々の間に生まれている多元的な社会関係の形成・変容のあり方について一定の結論を示すことを目指した。

３．研究の方法

研究の目的において示した①から③についての調査を進めるため、合計 5 回トルコに渡航し、フィールドワークを実施した。現地調査では、地元住民や発掘調査を行う考古学者、現地を訪れている観光客などへの聞き取り調査が中心となった。調査期間や調査地は以下の通りである。

▫ 第 1 回渡航調査
期間：2014 年 8 月 11 日（月）～9 月 4 日
調査地：パターラ、ギョルヒサル（キビラ）、ダスクィリオン、アンカラ、イスタンブル

▫ 第 2 回渡航調査
期間：2015 年 2 月 17 日～3 月 4 日
調査地：アンタルヤ、パターラ、ギョルヒ

サル（キビラ）、アンカラ、イスタンブル
- 第 3 回渡航調査
  期間：2015 年 8 月 11 日～9 月 11 日
  調査地：アンタルヤ・デムレ（ミュラ）・パターラ・ギョルヒサル（キビラ）・アンカラ・イスタンブル
- 第 4 回渡航調査
  期間：2015 年 10 月 17 日～10 月 26 日
  調査地：アンタルヤ・「リュキアの古道」（オヴァジク～アドラサン）・イスタンブル
- 第 5 回渡航調査
  期間：2016 年 8 月 8 日～9 月 11 日
  調査地：アンタルヤ・ギョルヒサル（キビラ）・デムレ（ミュラ）・パターラ・イスタンブル

４．研究成果

合計 5 回実施したトルコへの渡航調査では、主に地中海地方の遺跡を中心に、遺跡の周辺に暮らす地域住民や観光産業、遺跡を発掘する考古学者の動きを調査した。なお、当初の研究計画ではデムレにあるミュラ遺跡を挙げていたが、こちらは発掘調査が中止されて関係者との調整がつかなかったため、初年度はダスクィリオン遺跡での調査に変更した。

また、地中海地方の遺跡を活用した新しい観光振興の動きとして、「リュキアの古道」トレッキングルートについて、アンタルヤとミュラ遺跡のあるデムレ周辺で、その成立に関わった人物や協力者に対する聞き取り調査を実施した。以下、各調査地で明らかになったことを述べていく。

（１）パターラ遺跡（Patara）での調査

トルコ地中海地方は古代にはリュキア（Lycia）と呼ばれる文化が栄えていた。この地域には、リュキア文化に由来する遺跡が点在しているが、なかでもパターラは、リュキア都市国家群の主要国として栄えていた。現在は、その遺跡は、1960 年代に移動牧畜民が定住して成立したゲレミシュ（Gelemiş）村内に位置している。人口約 1,000 人のゲレミシュ村の中心から約 2km 離れたところに、かつての都市国家パターラの中心部があり、円形劇場のほか、アゴラや浴場が残っている。そこからさらに 1km ほど進んだところには、全長 16km の砂浜が広がり、夏には周辺のリゾート地から観光客が行楽に訪れている。

現地調査では、海岸部の小さな農村だったゲレミシュが、1980 年代後半からである。村の観光開発や遺跡調査がほぼ同時に開始されたことで、どのように変容していったのか、ペンション経営を始めた地元住民への聞き取りを中心に、あとづけていった。特に、遺跡保護を理由に、パターラ遺跡の発掘を行っていた考古学者たちが、1990 年に政府に働きかけてゲレミシュの観光開発を止めたことで、観光による村の経済振興を図ろうとした村民と、発掘を進めたい考古学者との間には緊張関係が生じた。結果として、開発が停止されたゲレミシュ村の雰囲気は 25 年前とほとんど変わっていない。

しかし、近年では考古学者と村民のそうした関係に改善がみられるようにもなってきている。発掘の進展により砂にうずもれた遺跡が姿を現し始め、遺跡の公園整備も急速に進むなかで、パターラの遺跡が観光客や村民の間でも観光資源のひとつとして認識されるようになってきたことが大きい。特に、リュキア同盟の首都機能を持っていたとされる議事堂跡が民主主義発祥の地としてトルコ国民議会の支援による復元事業が行われたことで、遺跡の公園化が進み、駐車場や見学ルートが整備され、案内板も多言語表記の形で一新された。

また、近年急激に観光開発が進んでいる近隣のリゾート地の動きをみながら、村長を中心としたゲレミシュの人びとは、考古学者が開発を止めた結果として「手つかず」のまま残ったのどかな村の雰囲気を残しつつ、遺跡を含めた観光開発を志向するようになっている。

（２）キビラ遺跡（Kybira）での調査

リュキアの北辺にあたる都市遺跡キビラはブルドゥル（Burdur）県の小都市ギョルヒサル（Gölhisar）を見下ろす山上に主要な遺構がある。この遺跡は主要な観光ガイドブックには掲載されておらず、観光という観点ではほとんど知られていない。キビラ遺跡の本格的な発掘は、2006 年に開始された。2009 年には音楽堂の床面から保存状態の良いメドゥーサのモザイクが発見された。現在では遺跡のシンボル的存在となっており、ギョルヒサル市のウェブサイトなどにも使われるようになってきている。また、2012 年には音楽堂の玄関前を飾っていた 560 平方メートルに及ぶ巨大なモザイクの床面が出土し、音楽堂の建物と合わせて、2014 年までに修復・復元が行われている。

発掘調査に関わる考古学者たちは、地域住民との関係は良好だと話すが、その背景にあるのは、ギョルヒサルの人々にとって、キビラが観光資源になりうるという期待である。ギョルヒサル市は、発掘が進むなかで遺跡を市のシンボルとして活用するようになっている。また、遺跡の発掘調査をビジネスの機会と捉えている地元の企業経営者もいた。

ただし、キビラでの発掘は始まったばかりであり、遺跡の出入り口には料金所やトイレ、見学路なども整備されておらず、遺跡の公園化はほとんど進んでいない。遺跡自体も、発掘調査が行われていない時期は閉鎖される。また、ギョルヒサルにはホテルも少なく、観光客の受け入れ態勢があるとは言い難い。さらに、住民が遺跡見学に訪れることは少ない。

その一方で、発掘調査隊の考古学者の間で、観光資源として遺跡を活用したいという人々の期待の大きさは意識されている。学術的な意義の高さだけなく、「アナトリア最古

の…」や「ほかの遺跡には見られない…」といった派手なうたい文句をつけられる、「メドゥーサの次」の「目立つ」遺物を発見することは、ここで発掘を続けるうえでも重要と、冗談まじりに話す考古学者もいた。

（3）ダスクィリオン遺跡（Daskyleion）での調査

ダスクィリオン遺跡は、マルマラ海を挟んでイスタンブルの対岸にある都市バンドゥルマ（Bandırma）近郊のエルギリ村（Ergili）に位置している。村にはペンションやホテルなどはない。村の主たる産業は農業と牧畜業で、養鶏場や養蜂場もある。

ダスクィリオン遺跡を特徴づけるのは、フリギュアからリュディア、アケメネス朝、ヘレニズムに至る異なる時代の城壁と、アケメネス朝期の太守宮殿跡、ゾロアスター教の聖域跡である。これらの点で、この遺跡の学術的重要性は非常に大きい。しかし、ダスキュレイオンには、エフェソスやペルガモンなどのように観光地となっている遺跡に多く見られる競技場や劇場跡のような視覚的に「目立つ」建造物の遺構はない。

また、発掘に関わる考古学者たちは、エルギリ村の住民との関係は悪いと話す。その要因のひとつとして、ダスキュレイオン遺跡とその発掘調査が村の主産業である農業を拡大させていきたい住民にとって障害になっていることが挙げられる。発掘調査隊の宿舎の庭の木が切られるなど、発掘をよく思わない住民からの嫌がらせもあるという。

一方、村長をはじめとする村の住民は、遺跡に全く関心がないわけではないが、発掘調査をしている考古学者たちが何をしているのかがわからないと主張する。しかし、考古学者たちは彼らの関心は必ずしも遺跡の考古学的意義にはなく、出土する遺物の金銭的な価値にあると考えている。村の中心には古代の墓地が広がっていたと考えられており、村の人々がそのことを知れば、「宝探し」が横行するのではないかと考えているのである。トルコでは遺跡への盗掘の横行が大きな問題となっていることも背景にあり（参考 Tanaka, 2010）、発掘に従事する考古学者と地域住民に対して十分な信頼関係を築くことが難しい状況が生まれている。

一方で、こうした状況を打破しようという動きもある。発掘調査団のメンバーで、遺跡の公園整備計画を担当している専門家は、村の女性たちを招いて、発掘調査に対する意見を集めるワークショップを開催するなど住民と考古学者との間で遺跡や文化遺産に対する認識のすり合わせを行う取り組みを続けている。

（4）「リュキアの古道（Lycian Way）」に関する調査

近年、「リュキアの古道」と名づけられたルートを歩くトレッキング観光の人気が欧米人観光客やトルコ人中上流層の観光客の間で高まっている。「リュキアの古道」は、テケ半島に残る遺跡群を見どころとし、それらを放置された古代の道やこの地域にかつて多く暮らしていた移牧民が家畜を移動させるために使った山道を結んで設定された。このルートを開拓したのは、トルコ在住の英国人女性ケイト・クロウ氏であり、彼女はテケ半島山間部を歩きつつ、1990 年代後半から総距離 540 キロのトレッキングルートを、4 年の歳月をかけて完成させた。特に、これらの古道で結んだのは、宿泊場所となる村々やキャンプに適した場所、観光地化したリュキア文化の遺跡、山間に点在する未発掘の遺跡であった。さらに、そうした「リュキアの古道」のルート上の見どころの情報をまとめた地図付きのガイドブックも出版している（Clow, 2014）。現地調査では、関係者への聞き取りのほか、「リュキア古道」の一部（ベイジク―アドラサン）を実際に歩き、トレッキング観光の状況をみていった。

もともとはクロウ氏の「趣味が高じて」つくられた「リュキアの古道」であるが、その認知度の高まりとともに、ルート上にある村の住民、トレッキングツアーの手配を行う旅行会社などが彼女に協力し始めた。また、トルコ政府や大手企業の支援を取りつけ、要所に案内標識が立てられるようになった。2012 年以降、彼女とその協力者によって、ルート管理を行う NGO として「文化ルート協会（Culture Routes Society）」が設立されている。

さらに、このトレッキングルートを活かした地域振興も行われるようになってきている。ミュラ遺跡のあるデムレ近郊のホイラン村では、「文化ルート協会」の協力のもとで「リュキアの古道」を活用した社会開発プロジェクトを進めている。この村とその周辺には未発掘の遺跡が点在しているが、現行の「リュキアの古道」ルートからは外れている。関係者によると、周辺の遺跡をつなぎ、村を「リュキアの古道」ルート上に組み込むことで、村にトレッキング客を引き込み、村の観光振興に結びつけようという狙いがあるという。「リュキア古道」という観光ルートが生まれ、定着したことで、村の遺跡を観光資源化する動きが地域住民の間から生まれていることが明らかになった。

（5）考察と今後の展望

パターラ、ダスクィリオン、キビラと、発掘調査とその後の遺跡の保存・管理の動きと、観光開発も含めた地域の人々の遺跡への関わり（遺跡周辺の土地利用のあり方）をみていく中で、明らかになったのは、遺跡から発掘された遺物に、地域住民との関係や発掘調査の進展が左右されていることである。その意味で、遺産化の過程は、文化遺産に関わる利害集団の間だけでなく、そうした集団と文化遺産とされた過去の痕跡との間でも、双方向的に進展している。

また、様々な集団の過去の捉え方の交錯のなかで過去の痕跡が文化遺産となっていくだけでなく、過去の痕跡それ自体もそれに関わる利害集団を形づくる役割を果たしている。特に、調査の過程でみていったそれぞれの事例のなかで、遺跡と地域住民の生活の関係性の違いは、遺産化の対象としての遺跡に対する彼らの捉え方の違いを生むだけでなく、考古学者たちの遺跡に対する捉え方とも異なっていた。遺跡のどんな側面に関心を持つかは利害集団によって異なるにせよ、遺跡の存在自体に利害集団の動きが左右されている。その意味で、遺産化の過程は様々な利害集団の遺産となった遺跡に対する異なる捉え方を残したまま進行していることが明らかになった。

調査結果については、全てを公表できたわけではない。また、調査を通して、特に地域住民の動きについては、1960 年代以降のトルコ地中海地方で進んだ経済開発による社会変容と合わせてみていく必要性があることもわかってきた。今後も調査を継続しつつ、本研究課題で得られた成果についての論文執筆に励みたい。

▫ 参考文献

Bartu-Candan, A. Remembering a 9000 Years Old Site: Presenting Çatalhöyük. In E. Özyürek (ed.) *Politics of the Public Memory in Turkey*. Syracuse: Syracuse University Press, 2007, 70-94.

Breglia, L. *Monumental Ambivalence: the Politics of Heritage*. Austin: University of Texas Press, 2006.

Clow K. *The Lycian Way: Turkey's First Long Distance Walking Route.* 4th Edition. Antalya: Upcountry Turkey Ltd, 2014.

春日 直樹（編） 『現実批判の人類学：新世代のエスノグラフィへ』 世界思想社、2011

Strathern, M. *Partial Connections*. [Updated Edition] Walnut Creek: AltaMira Press, 2004[1991].

Tanaka, E. The Idea of Place in the Protection of Cultural Heritage: in the Case of Claims against the Illicit Transaction of Antiquities from Turkey. *Japanese Review of Cultural Anthropology* 11, 2010, 25-46.

―. Cultural Heritage Issues in Turkey and the Category of 'Europe': Roman Mosaic Collections Discovered in Zeugma, Southeast Turkey. *Senri Ethnological Studies* 81, 2013, 149-168.

―. Heritage Destruction in Context: the Case of the Roman Mosaics from Zeugma, Turkey. International Journal of Heritage Studies 21(4), 2015, 336-353.
DOI: 10.1080/13527258.2014.964287

田中 英資 『文化遺産はだれのものか：トルコ・アナトリア諸文明の遺物をめぐる所有と保護』春風社、2017

Viveiros de Castro, E. 1998 Cosmological Deixis and Amerindian Perspectivism. *The Journal of the Royal Anthropological Institute*, 4(3), 469-488.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2 件）

1. Eisuke Tanaka Archaeology Has Transformed "Stones" into "Heritage": the Production of a Heritage Site through Interactions between Archaeology, Tourism and Local Communities in Turkey. *HISTÓRIA: QUESTÕES & DEBATES.*（採録決定）2018 年（予定）（査読あり）
2. 田中 英資「協働」を通した文化遺産の生成：トルコにおける二つの発掘現場を事例に 『福岡女学院大学紀要 人文学部編』25: 79-105 2015 年 （査読無し）
http://hdl.handle.net/11470/86

〔学会発表〕（計 4 件）

1. 田中 英資 古道の「文化遺産」化：トルコ地中海地方におけるトレッキングツーリズム開発の事例から 観光学術学会第 6 回大会 2017 年 7 月 2 日（予定）神戸山手大学（神戸市中央区）
2. Eisuke Tanaka Archaeology Has Transformed "Stones" into "Heritage": the Production of a Heritage Site through Interactions between Archaeology, Tourism and Local Communities in Turkey.. Association of Critical Heritage Studies. 2016 年 6 月 6 日 University of Quebec in Montreal モントリオール（カナダ）
3. 田中 英資 「遺産」をプロセスとしてみることについて：トルコにおける古代遺跡の遺産化の中での考古学の関わりからワークショップ『今日、考古学になにができるか』 2016 年 1 月 30 日 九州大学（福岡市西区）
4. 田中 英資 遺産と人々の協働：トルコ南西部パターラ遺跡とキビラ遺跡の事例から 日本文化人類学会第 49 回研究大会 2015 年 5 月 30 日 大阪国際交流センター（大阪市天王寺区）

６．研究組織

研究代表者：田中 英資（TANAKA, Eisuke）
所属機関：福岡女学院大学・人文学部・准教授
研究者番号：00610073